

たかおかまち

- 本遺跡の調査は、都市計画道路（橋場・若宮線）の建設に伴うものであり、一九九七年より三カ年にわたって実施した。遺跡周辺は



(金 沢)

現在金沢市の中心街に位置し、藩政期には武家屋敷地が展開した。調査地は前田家家臣中川氏（禄高五千石）の屋敷地にあたることが、町絵図などの文献史料より判明している。

本調査では古墳時代、奈良・平安時代、江戸時代の

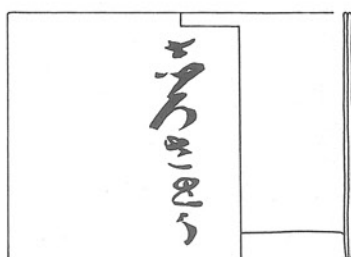
遺構と遺物が確認されている。古墳時代、奈良・平安時代の遺構・遺物は比較的まとまった量が出土しており、中・近世以前の金沢市街地の様相を知る上で、貴重な資料となっている。特に一九九九年の第三次調査では、国内でも類例の少ない半瓦当の他、銅製帯金具・円面硯・奈良二彩など、有力氏族の居住を想定させるような遺物が出土した。

近世段階では、ゴミ穴や礎石建物などの遺構が確認された。今回報告する木簡はいずれも、近世のゴミ穴SK〇九（出土遺物より一七一八世紀の遺構と思われる）より出土した。SK〇九は調査区の西端に位置するため全体の形状は不明であるが、近世の遺構面よりの深さ約2mという大規模な遺構である。覆土は砂質土と有機物を含む層が交互に堆積し、木簡はいずれも有機物を含む層より出土した。

8 木簡の釈文・内容

- (1) ・「く大平源右」  
 ・「くくいた」<sup>〔めカ〕</sup>  
 173×21×3 033
- (2) 「志ろさとう」(曲物側板)  
 最大径90×高さ 061
- (3) <sup>〔丸カ〕</sup>  
 (88)×29×4 081

(1)は上部の左右それぞれ二箇所に切り込みを入れ、宝塔状に加工するが、あるいは人頭状に加工したものかもしれない。上部右側の



(2)



(3)



(1)

半円状の部分は側面からのケズリによって丁寧加工されている。下部は側面からのケズリにより尖らせるが、端部は切り落とされている。表裏面ともケズリが施されており、丁寧に仕上げられている。両面に墨書が認められ、片面には「大平源右」□という人物の名が、その裏面にはかな文字が書かれている。大平源右□なる人物は文献史料では確認できなかったが、調査地が中川家の屋敷地であることから、中川氏の家臣団の一員である可能性もある。その形状から何らかの祭祀的な用途が想定されよう。

(2)は曲物の側面、継目のほぼ反対側に「志ろさとう」(白砂糖)と墨書するもので、贈答用白砂糖の容器と思われる。底板が現存し、底板及び側板の一部分に焦げ目がある。金沢市内での贈答用白砂糖容器の出土例としては、他に安江町遺跡から出土した「進上／白砂糖／一曲」の墨書がある曲物蓋がある(金沢市教育委員会「安江町遺跡」(一九九七年)、本誌未収)。

(3)は長方形の材の片面に墨書がある。釈文は確定し難いが、「丸」または「九」の可能性がある。材は上下端とも欠損しており、特に上端は切り込みを入れた後に折り取られている。文字は一字で完結するようであり、墨書面には明瞭なケズリの痕跡が確認できる。用途は不明。

(谷口明伸)